

英米東南アジア平和之旅 第5(最終)章 シンガポール、台湾

—アママとの再会—

インドネシアのスラバヤ空港から世界有数のハブ空港であるシンガポールのチャンギ国際空港に到着したのは夜7時頃だった。

私たちは急いで出国手続きを済ませ、一晩だけのシンガポールを体験すべく市内へと向かった。

ほんの数時間前まで、バスも見つからないスラバヤ島にいた私たちは、今、ネオンの輝く大都会・シンガポールにいる。

眼に映った人びとが本当に新鮮にみえる。地下鉄に乗った。インド系の人とアジア系の人が英語で話している。どうやら、会社の同僚のようである。

反対側の耳からは中国語が聞こえてくる。看板には英語、中国語、インド語が書かれている。



ここでは様々な民族の人たちが、様々な言語を話し共存しているのだ。なんと魅力的な国だろう。。。

街並みの風景はどこか上海と似ている。一足先に上海に帰ってきてしまったような、そんな気さえした。

しかし、この物価は相当高かった。インドネシアで六日間使ったお金を、シンガポールでは一晩で使ってしまうくらいだった。物価の安い国々を渡り歩いてきた私たちは、日本並みの物価に驚き、財布の中の残高を何度も確認した。

中国で2元の「肉まん」も、シンガポールでは1ドル、約10倍である。私たちは肉まんを片手に噴水ショーを見に行った。翌朝の飛行機で台湾に飛び、『東南アジア平和之旅』最後の駅である。。。

5年ぶりの台北

9年前、大学二年生の夏休みの一ヶ月間、私は台北のアママの家に滞在していた。

初めてのホームステイ、初めての海外一人旅である。

台湾を理解するため、中国語を上達させるため私はなんの恐れもなく、好奇心だけを背負って、新しく就航したばかりの鹿児島ー台北行きの飛行機に乗り込んだ。

そこで待っていたのは、様々な人々との「出会い」と言語の壁だった。

アママは、私の兄の親友のおばあさんである。小さい頃から本当の家族のように慕ってきた兄親友家族とは、いまでも親密な関係を保っている。アママは台湾語でおばあちゃんの意味で、私もそう呼んで慕っていた。

アママは日本語が話せた。当時18歳だった私は怖いもの知らずで、まだ不十分な中国語のまま、独りで台北旅行をした。



毎回家に帰ってくると、「ママが」おかえり」と言ってくれた。そんなママと家では日本語で話せることで安心した。

しかし、「歩外に出るとそこは」海外「耳に入ってくる中国語のスピードは授業中に聞くそれよりもずっと速かったし、知らない単語ばかりだった。

あるとき、道に迷ってママの家に帰れなくなって泣いてしまったことも思い出せずにはいられない。

そんな大学二年生の夏から、修士二年生となって訪れた二度目の台湾、言語の壁はもちろん、自分自身にも少なからず自信を持つことができるようになっていた。

おもえば「また会いに来るね。」「とママにのみならずを告げてから、いつの間にか9年の歳月が経っていた。

ママとの再会



台湾に着いて二日目、私は地図を見ながらママの家を探した。

街並みが変わっているところもあったけど、懐かしいママの家のある通りに着いたとき、足が勝手に動き出した。

わたしの足は9年前の記憶をしっかりと覚えていた。

その日は旧正月のため、親戚の人たちがみんなママの家に集まっていた。

「ママ!」と呼ぶと、玄関から懐かしい優しい笑顔のママが出てきた。私たちは抱き合った。

ママは今年64歳になり目がほとんど見えなくなっていた。ママは私の身体を手探りで触り、くっつきそうなくらい顔を近づけて、私の目を覗き込んだ。

そして、「えみ、おかえり。」「と言った。私は9年ぶりのその言葉に目頭が熱くなった。

ママは話し方も、話すスピードも昔とすこしも変わっていなかった。変わったのは言語だけである。昔は聞き取れなかった中国語も、今ははっきりと、何を喋っているのかがわかる。うれしかった。

私が復旦大学で頑張っていること、東南アジアを旅してきたこと、母が亡くなったこと、ママはすべて知っていた。

そして、笑顔で私に話し続けた。

私がママに自分の夢を告げると「がんばりなさいよ」「そう言って背中をpushした。

この言葉を聞いたため私は台湾へ来たのだと思った。ママの笑顔をもう一度見るために、私はここに来ただのだ。

「ママ、また来るからね。」「と言って玄関に向かうと、ママは「私はもう64歳になったの。えみとはもう次に会えないかもしれない。でも、絶対、えみなら出来るから。がんばりなさいよ。私はえみと

を信じてるから。」

アマのその言葉を聞いて、涙がこぼれそうになるのを必死に堪え、私はアマの家を後にした。

5年の月日は私を成長させ、そして私が気づかぬうちにアマとの距離を確実に離れてしまっているような気がした。

しかし、私の母や、アマ、家族に対する愛は永遠に変わらない。

台北から台中へ

東南アジアの国々では、全てが新しく、何事も気が抜けなかったが、台湾に来て、なんだか家に帰ってきたような、そんな居心地の良さを感じた。

私たちは、新幹線に乗って、台中へと向かった。

窓から見る景色は、まるで日本の田舎の景色のようだった。冬だというのに春のように温かい台中の気候は、私たちを眠りに誘っていった。

台中に着くと、お寺に行き、佛様にこれまでの一ヶ月の旅のお守りに感謝を述べた。久々の夜市はお正月中で人通りは少なかった。

台中のホテルに着くと、親友と二人でこれまでの旅の写真を振り返った。いよいよ翌日、私は上海に戻るのだ。写真を眺めながら、語りきれない思い出話に二人で笑いあった。

辛かったことも、苦しかったことも、いま振り返ってみるとかけがえのない思い出ばかりである。落ち着いたころ、明日の台北への移動に備え早々とベットに入った。

母の教えてくれた地震

私は夢を見ていた。母がいた。なんだかいい夢ではなかった。早く目覚めたい、早く目覚めたい、と思っていた。

すると、横になっている身体全体で大きな揺れを感じた。パッと目覚めて、天井を見た。地震だ！午前4時の分頃、台中で地震が発生した。

私たちは貴重品だけを持ってすくさま部屋を出た。9階から非常階段で1階へと駆け下りた。これまでに体験したことのない大きな揺れだった。

フロントに着くと、揺れに驚いた人たちが次々と降りてきた。



スタッフの人は「震源は台南だから問題ない、心配しないでください」と言った。しかし私たちはまだ部屋に戻る勇氣はなかった。地震発生から1時間が経つまで、私たちはフロントで様子を見ることにした。

旅の終わる

翌朝、夜が明けるとすべに、台中を離れ北へと向かった。

この旅の最終日にまさか地震に遭うとは思ひもなかった。

台北のテレビは台南のマンション崩壊のニュースを24時間報道していた。

生存者が一刻も早く救出されることを願い、私は台北桃園空港へと向かった。

2月7日午前2時30分、飛行機は無事に上海浦東国際空港へと到着した。長かったようで、あっというまの1ヶ月間の『東南アジアの平和之旅』は終わった。

日記を書きながら振り返ってみると、旅で出会った多くの人々の顔が思い浮かんで消えた。

あの日、あのとき、あの場所でしか会うことのできなかった人たち、彼らの笑顔に救われて、私は無事に困難を乗り越えることができた。

そして私は、この旅を通して、将来の道を決心した。復旦大学を卒業後、アメリカの大学院で平和学を学びたい。博士号を取って、日本の大学の教授になりたい。

私が日本の大学でたくさん素晴らしい人たちに会ったように、これから未来を背負う学生たちに、大きな夢と、平和を伝えていくことができたなら、この上ない幸せである。

そして、Peace活動に積極的に参加し、様々な方面から「平和」を作って生きたい。

一生忘れることのできない、一生忘れたくない旅をさせてくれた東南アジアに、本当に、本当にありがとう。私の、平和への旅は、これからもうっへん。

2016年2月11日 復旦大学留学生寮1615室にて

